

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業成果報告書

教育委員会名：盛岡市教育委員会

(防災に関すること)

I 想定される主な災害とモデル地域選定の理由

岩手県は、東北地方の北部（北東北）に所在し、北は青森県、西は秋田県、南は宮城県と境界を接している。そして、盛岡市は、岩手県の内陸部、北上盆地のほぼ中央に位置し、市内中心部で主流北上川に雫石川、中津川が合流する。中心市街地からは、奥羽山脈に属する岩手山（北西）と駒ヶ岳（西）、北上高地に属する早池峰山（東）の他、独立峰の姫神山（北）などを望む。5年前の東日本大震災では、岩手県沿岸部が津波の被害を受けたほか、内陸部でもライフラインが停止する等の被害が出た。地震だけでなく、洪水や噴火による災害も想定される。さらに、県内全域が豪雪地帯に指定されており、大雪による災害も想定される。

本事業においては、児童と教職員の防災意識を高めることと、保護者や地域との連携を課題とし、事業を実施した。

II 取組の概要

〈事業名〉

岩手の復興に向け、自分たちができることを考えよう

盛岡市立城北小学校

(1) 事業の概要

「復興・発展を支えるひとづくり」という復興教育の目標を踏まえ、防災教育と関連を図った復興教育の推進に留意すると共に、復興教育で身に付けさせたい「いきる」「かかわる」「そなえる」の教育的価値を目指した復興副読本の効果的な活用方法についての研究を行い、研究成果を広く発信するよう努める。この「いきる」「かかわる」「そなえる」は、防災教育の内容と密接な関係があることから、本事業を実施することが、本県の目指す復興教育につながるものであるととらえている。

そこで、「いわての復興教育プログラム」及び文部科学省作成資料『「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育』、『「生きる力」を育む防災教育の展開』を踏まえ、事業内容を検討しながら実践に当たり、事業内容の開発・普及に努める。

(2) 事業の取組内容

ア 復興副読本の計画的活用と職員・保護者・地域への研修会

- 各教科等の年間指導計画に復興副読本の活用計画を位置付け、各月の職員会議で確認し実践を積みかさねた。
- 1月14日には、校内研修会を設定し、各学年の授業実践を報告し交流する時間を設けた。そこで報告された今年度の授業指導案は、昨年度のものに合わせて冊子にまとめ、校内外での活用を図る。
- 8月27日、教職員向けの復興研修会とPTA主催の講習会に講師を招き、ストレスや不安を解消する呼吸法や「ラッタッタ体操」を教えていただいた。全校朝会や体育の授業などで実践することにより、被災児童を含めた子どもたちの心の健康を保持している。

イ 専門的な知識と技術を活かした防災に関わる出前授業の実施

○第5学年防災教室（理科出前授業）

実施期日：平成27年8月28日

講師：盛岡地方气象台 水害対策気象官 工藤貴彦先生
技術専門官 齊藤伸次先生

内容：理科「台風と天気の変化」

- ・台風の進路と天気の変化
- ・台風による災害や、災害に対する備えについて



○第6学年防災教室（理科出前授業）

実施期日：平成27年10月27日

講師：盛岡地方気象台 防災管理官 藤原政志先生

震津波防災官 畠山康憲先生

内容：理科「変わり続ける大地」

- ・地震や火山の噴火に伴う大地の変化
- ・地震や火山の噴火による災害や災害に対する備えについて



ウ 宮古市鉾ヶ崎地区を中心とした現地学習【9月4日（金） 第5学年104名、引率5名】

①東日本大震災の被害の様子を、実際に現地に立ち自分の目で見ると。

- ・鉾ヶ崎小学校までの約500mの道を歩きながら、高さ10mを超える防潮堤建設工事の様子を見たり、いたるところに残る大震災の傷跡を確認したりすることができた。かつて道路の両側にはたくさんの民家が並んでいたこと、大津波は電線付近を通過したことなどの説明を校長から受け、被害の大きさを目の当たりにした。

②津波直前の鉾ヶ崎小学校の児童の避難行動を迫体験し、当時の子どもたちの気持ちに寄り添う。

- ・当時在籍していた鉾ヶ崎小学校の子どもたちの避難経路を、そのまま迫体験した。小雪が舞う真冬並みの寒さの中を、大きな不安を抱えながら避難した子どもたちの気持ちを想像することができた。

③浄土ヶ浜にある津波記念碑（昭和大津波・チリ地震津波）から、避難の原則は高台に逃げることを理解する。

- ・浄土ヶ浜でも大震災の傷跡を確認した。また、レストハウス脇にある昭和大津波とチリ地震津波の記念碑から「大きな地震のあとには津波が来る」「津波から逃げるには遠くではなく高いところへ」「地震がなくとも潮が引いたら津波が来る」などの先人からの教を学習した。

④防潮堤工事の様子や宮古市魚市場のセリの様子を見学し、復興に向けての確かな歩みを確認する。

- ・宮古市魚市場では、水揚げされたばかりのカレイやタコ、鮭などのなじみの深い魚はもちろん、ドンコやクエといった初めて目にする魚に興味深く見入った。セリを見るのももちろん初めての体験であり、活気のある市場の様子から復興に向けて力強く動き出した宮古市を感じることができた。



エ 山田町立山田北小学校との交流

○実施期日及び対象学年

実施期日：平成27年5月14日（木）～21日（木）及び11月5日（木）～13日（金）

対象学年：全学年

○具体的内容

- ・児童会計画委員会（児童会執行部）が中心となり、前期と後期の2回にわたって募金活動をい、計画委員会作成のメッセージと校内コンサートの様子を収めたビデオレターとともに送付した。



II 取組の成果と課題

(1) 成果

- ・5年生による宮古市訪問や高学年への防災に関わる出前授業、さらに被災地の学校との交流を継続することにより、子どもたちは被災地に思いを馳せながら自分たちの防災についても真剣に考えることができた。
- ・保護者や地域に向けての講演会や PTA 教養部によるセミナーにより、復興教育や防災教育、そして、心の健康について広く発信することができた。
- ・研修会だけでなく職員会議の度に毎月の取組内容や方法を確認し実践交流を行うことにより、全教職員の共通理解の基、復興教育・防災教育に当たることができた。

(2) 課題

- ・震災の記憶や防災の意識を風化させないように取組を継続していくこと。
- ・「復興副読本活用計画」や「活用実践事例集」等の活用と普及。